

エコロジイと人民詩精神

暮尾 淳

長谷川さんの感想

それは今年の一月の終りだった。ぼくは秋山清、長谷川七郎両氏と、新宿で一晩を飲んで遊んだ。あるいは遊んでもらったことだったのかもしれないが、その真夜中の零時すぎに、長谷川さんは姿勢を正してから、右手をまるで帽子のひさしにやるかのようにして会釈をし、「この先ちよつと用事をたしてゆきますので」といつて一人で別れていったが、それがなんともおかしくてならなかった。ほんとうに用があつたかはともかく、長谷川さんは飲んでいつもそんなダンディな別れかたをするのだろうか。その折のいなしなので、もう秋山さんも覚えていないだろうし、などと、これがこのエッセイの枕なのである。「五郎八井に上等な飯を盛つたようなもの」

というのが、その時の長谷川さんの、ぼくの詩についての感想だった。五郎八井(茶碗)とは、大きめの茶漬茶碗のようなものであるらしく、それが文学観みたいなことを指し、上等な飯が抒情の質をいつているのならば、ぼくにとつては結構気に入りの、得意になつて人にしゃべりそうなことなのだが、要するにちぐはぐな身にそぐわないことをしているのではないかということ、長谷川さんは詩の先達としていつてくれたわけなのだろう。その意味ではつづいての、「あんたは『コスモス』の人民詩の許容の限界だ」という戯評にもぼくはうなづくのである。上等な器に堂堂と上等な飯を盛りなさいというのが、その真意だつたらうと思うが、そんなふうな気楽にしゃべつてくれた長谷川七郎に感謝するとともに、それをきっかけにしてしばらく考えることがぼくにはあり、そのことをいわばノートふうにごくに綴つてみようとするわけである。その中身は新しくなどないが、いまのぼくには必要な作業なのである。

なお誤解されてもわるいので、一言つけ加えておけば、長谷川七郎自らも今の己れを、「コスモス」での許容の限界と考えているらしい詩人の一人なのではある。つまりぼくが問題にしたいのは、人民詩精神なることばについて、ぼくがぼくなりに思っているそのひろがりや奥行についてである。「コスモス」に同人としているかぎり、それについて考えることを避けて通ることはできないだろうし、「コスモス」はまだそのような雰囲気を残している。ぼくはそのことを、エコロジイの枠組から考えてみたいと思うものである。

エコロジイについて

エコロジイ(ecology)ということばは、ギリシャ語の「家」あるいは「生活の場」を意味するoikosに由来している。これは普通には「生態学」と訳されていて、生活の場における生物とその環境との相互関係の科学と定義され、より現代的には、自然の構造と機能に関する学問として定義されている。そこでは人類も自然の一部として考えられている。もう少しせまく静的にみていうと、たとえば細菌学、鳥類学、植物学などという縦割り分

類を、生態の層として全体的視点から横割りできらえるのが生態学であり、それはまたこのような縦割り分類を同じく層的にとらえる分子生物学、遺伝学なども階層的に関連している。

生態学が、生物学の一分野として歩みはじめたのは、十九世紀頃からであるが、一般的な市民権をことばとして得るようになったのは、つい十年ほど前、一九七〇年代に入つてからである。いうまでもなく「生物環境の科学」が、人類文明の質的創造とその維持に関して、さまざまな警告を発しはじめてからである。

このことには、現代科学を象徴する二つの技術が深くかかわっている。その一つは、エレクトロニクス、コンピューターの進歩であり、もう一つは宇宙科学、ロケット工学の進歩である。

すなわち層もしくは系としての生態の大きな様相を、人工衛星などからとらえて地上に送り、それをコンピューターなどで分析、統合してその変化や全体像を迅速にとらえることが可能になり、生態学はエコロジイとして急速な発展を遂げたのである。月ロケットが成功したのはそんなに前のことではなく、大

国の軍事威信をかけての偵察、宇宙開発競争の、いわば副次的な結果として、エコロジイは、急激に破壊されてゆく地球の姿を皮肉にもとらえはじめたのである。

エコロジイは、地球を「ヒトの住む星(日本生産性本部)として把握する。宇宙生物学は、現在地球上の環境をコントロールしているような高度に発達している酸素的な緑の生態系は、太陽系の天体にはどこにも存在していないし、もし人間(それもきわめて少数)のための総合生命維持システムを、自然の基本的な機能に人工的にとつて代わらせることができるとしても、それがいかに巨大かつ途方もなくこみ入った、まずは実現不可能な機構を必要とするかを、確認している。

エコロジイの基礎には、生物地球化学的循環の原理がある。地上の生物は、自然界に存在することが知られている九十余の元素のうち、三十から四十を必要として使っているのであり、それらは食物連鎖その他のさまざまな関係によりつながっている。たとえば無計画なダムによるサケの遡上阻止一つをとつても、サケが高地で産卵し死亡することで、海からとりもどした貴重な栄養塩を沈積させ大地にかえすというような、無機物の循環ル

ープがこわれ、植物の相が移り、動物が盛衰する。

エコロジイはまず、なによりも相互連関という概念を科学的に明瞭にしてくれる。それは目先の用不用という見方で存在や機能を割り切ることの、粗大な不毛性を理解することにはじまる。

十七世紀半ばの世界人口は約五億と推定されるが、それはわずか三百年余で四十億に増加し、生態系は赤ランプを灯しはじめた。北極の氷雪トロン中の鉛は、一七五〇年には二〇グラムミクロンであったものが、一九四五年にはその四倍となり、一九六五年には十倍を越えている。産業革命以降の人類の生態環境への侵入は、汚染物質の増加だけを見ても、この二十世紀後半にいたつて有史以来の速度となつていく。

これらについては公害というかたちでも論じられており、いまさら述べるまでもないが、低開発諸国において入手できる食糧や資源の不足は、人間や動物の排泄物に起因する慢性的な汚染や病気が結びついている一方、富裕な先進国(世界人口の三〇パーセント)にあつては、農工業による化学的汚染が有機物汚染よりずっと深刻であり、主として先進諸国

からつくりだされる空気や水の地球的汚染は、生存するものすべてを脅かすほどになっている。

これについてエコロジイは、「汚染は、人口が増加して一人当りのスペースが少なくなることによって増加するばかりでなく、一人当りの要求物がたえず増加し、年ごとに各人の捨てる物が多くなることによっても増加する。地球がいつそう混雑するにつれて、もはや放置しておくことはできない。一人の人間のくずかごは、他人の生活場所である」という。

もちろんその計算は単純にゆくはずはないが、一人の人間が、空気と水と食物を消費しながら生態システムを維持して生きてゆくためには、生態学者E・オダムは、最低十エーカー（約一万二千坪強）の生態的に完熟した面積の所有が要求されるとする。つまりぼくたち一人一人の生存は、アフリカの空や山川草木の変化と決して無関係ではないのである。一切が相互に関連しあつて生きている。ここに連帯への思想の、現代的根拠をばくは見出そうと考えるものである。

生態系の秩序は、たえず無秩序を排除する群集全体の呼吸により維持されている。そのなかから効率を求め一つだけを取り出すことは、たとえ殺虫剤と化学肥料による農業の維持においてすら、年々加わる費用と、生態系の変調をもたらしている。

「現在まで人間は一般的に、彼の環境の寄生者としてふるまい、その宿主（すなわち彼の生命維持システム）の繁栄をほとんど顧みずに、欲するものを取り出してきた。」——空気、水、食物すべてに関して、人間は依存的な他栄養者であることを忘れてはならず、人間文明はさらにもっと従属的であり、ますます資源を必要としているがゆえに、人間と自然のつながりはいは、明らかに相利共生的に生きてゆく方法をさらに追求してゆかねばならない。

「利用のあつれきを解き、汚染なしの最適な生活空間を維持するために、生産的生態系と保護的生態系のあいだの安全なバランスを得るよう土地を区画化（すなわち、地域化）する必要がある。土地や水の利用規制のみが人口過密や資源の乱開発を防止する唯一の実際的な方法である。」——高層住宅は可能であっても、水には地形上の限界がある。しかし、

エコロジイの箴言いくつか

「その短い歴史のなかで人間ははじめて地域的というよりむしろ究極的な限界に直面しており、人間が依存している資源と同様に、人間が自身の個体群を管理する時がやってきた。かくて生態系管理や応用人間生態学は、現在までそれぞれが独自に推進されてきた計画や数多くの学問領域の融合を要求する新しい画期的な分野となった」といい、ぼくの生態学のテキスト、E・オダム『生態学の基礎』（上下・培風館）は、その最終章「応用人間生態学への道」の冒頭に次のようないくつかの抜き書きをしている。現代文明社会に対する批評として味わいぶかいものがある。なお——につづくところは、ぼくの走り書きにも似た補足である。

「最適な質は常に、保持できる最大量より低めで与えられている。」——これは増加する世界人口についてもいえるし、またエコロジイは、最適な効率はずねに最大より小さいという原則を知っている。

「汚染のない環境に対する権利、個人の自由のための妥当な可能性、そして幸福追求のためのさまざまな選択権を行使するすばらしい人間を扶養するよりも、多くの汚染した餌

コミュニティのレベルであっても、エコロジイの実践には、いつも人間の欲求と政治と経済がからんでくる。

「多用途は不可欠であり、単なる生活のツマではない。」——自然の構造と機能において、何一つとして不用のものはない。

「再利用の概念は社会の最大の目標でなければならぬ。」——アキカンやガラスビンの資源すらすでにある限界を越えて不足へと向かいつつある。原子力エネルギーを大量に用いての低品位の鉱石からの金属の抽出は、世界を広大な露天鉱に変えてしまい、厄介かつ高価な汚染をもたらす。

「補給庫としての、また生活空間としての人間の環境の機能は相互に関連しており、互いに制限され、そして容量は無制限ではないということの一般的な認識は、帰するところ歴史的な「心構えの革命」にいたる。それは人間が大規模な生態学的な制御の原理を「応用」する用意が整ったことのもしい兆候であろう。」——生態学や応用生態学のコースは、小学校から大学院のレベルにいたるまで必要であり、人間生存の思想の核として形成されねばならない。

「テクノロジイのみでは人口や汚染のジレ

場の多数の家畜のように生きている。『肉体』を地球はずつと多く扶養することができ。」——人口密度が大きくなればなるほど、当然心理的、空間的にも自由度は小さくなってゆく。

「制限しているのはエネルギーそのものではなく、エネルギー開発の結果の汚染である。汚染はいまや人間に対する最も重要な制限要因である。」——原子力エネルギーは本質的には無限であるうと思われるが、その開発の結果として生じる廃棄物も問題になるのである。

「人間は動物というより地球の担い手であり、あまりにも正のフィードバックの影響下にありすぎ、それゆえ負のフィードバックの対象とされねばならない。」——開発、増産、繁殖とは逆のループでの生命活動を発想する時にきているのである。

「生態系の秩序を維持するために、エネルギーは無秩序の排除のために使われねばならない。汚染および収穫は保守のための出費を増加させる圧力である。われわれが自然からより多くを要求すればするほど、自然が持つ保守のためのエネルギーは少なくなり、それゆえ無秩序を防止するための人間の出費は増える。」——複雑な生物構造によりつくられる

ンマから逃れることはできない。人間と景観は一つであることの十分かつ完全な認識から生ずるモラル、経済そして法律の束縛もまた有効にならなければならない。」——問題はどのような政治経済の方向において、エコロジイは実践科学として、人類社会に有効でありうるか、というところにある。

なおオダムのこのテキストは、地域生態系のモデルに、原子力発電所を組み入れているものであることを、付記しておく。その点では、これは科学の問題としても論議がさらに積み重ねられてゆかねばならないだろう。

政治と経済について

ぼくは少しくエコロジイについて紙幅を割きすぎたようだが、自分の理解をたしかなものにするために、それは必要だったのである。以下に述べることは、そんなに言葉を費やさなくてすむだろう。

つまりぼくは、人間と社会の認識の基底に文明と歴史の新たな指標としてエコロジイを考えているのである。その尺度はイデオロギイではなく、科学によるものであると、まづぼくはそういおう。

西ドイツでは、エコロジストたちが政治の

分野に進出している。仲井斌「西独・緑のプラテスト運動」(『朝日新聞夕刊』)によると、各地のエコロジイグループやさまざまな市民運動集団が統合した「緑のグループ」と呼ばれるそれは、州議会進出に成功し、つぎには連邦議会選挙に向けて活動中であるという。その綱領の、エコロジカル、社会的、地域直接民主主義的、非暴力的と、四つの形容詞による柱は、エネルギーや資源が無制限でないことを知った七〇年代の市民の、経済成長主義への懐疑と、生活環境の破壊に対する防衛の「生活の意識」を基盤にしている。

しかしこの緑の「政党」は、もちろんエコロジイグループのみからなっているのではない。アウトサイダー、サブカルチャー、それに多様な市民の要求を結集した雑居な抗議運動の集合なのである。たとえば、婦人運動グループ、借家人グループ、徴兵拒否者同盟、ホモセックスグループ、レスビアングループ、反ファシズム行動サークル、原発反対運動、独立共産主義者同盟などを、それは含むものであると、仲井はいう。またいわゆるエコロジイ派にしても、保守、中道、左翼が同居しているのであって、こうした緑の「政党」の内部矛盾は大きく、「農本主義、自然への

憧憬、住民直接民主主義への指向、工業社会・経済主義・文明への反抗と悲観主義、中産階級とアウトサイダー、サブカルチャーのプラテスト」など、要するに緑の運動は、思想的には、「奇妙な(異質の連合)」を想わせる」と、仲井はいう。

西ドイツにおいて、これら「緑のグループ」がどのような政治的経緯をたどってゆくかはともかく、ぼくが関心を寄せるのは、この「奇妙な(異質の連合)」という事態についてである。日本においても、「地球の友」とか「何々の汀を守る会」とかいうように、エコロジカルなグループは、各所で活動をはじめている。そこには、コミュニティ、キャピタリズムなどという単純な図式ではとらえられない動きがあり、このことを、近代化を遂げた国々に共通な一つの世界的潮流といつても、過言ではないだろう。

エコロジイは地球生態系に迫る汚染による破壊への信号をまずキャッチした。そのほとんどの原因は、先進国の、つづいては近代化をいそぎつつある国々の、産業や社会の構造に由来している。だがそれを改めることは、体制をくつがえすことでは何ら保証されない。国連の予測では、西暦二〇〇〇年には、地球

上の人口は六十二億になり、都市生活者だけで三十二億になるといふ。その食糧を、水を、エネルギーを、経済成長をおさえて、どう供給してゆけるのか。さらにはそのような人類の繁殖と、ぼう大な他の生ける種との全体の調和を、どのようにして行なうてゆくのか。

現実には地球上は、不平等、矛盾だらけである。未来についての、バラ色ではない予感をいだきはじめた各々の民族、国家の、できるだけ優位に生存しうる位置を占めたいという欲求は強まるばかりである。一民族、一国家としてのそのイデオロギーを、この状況においてだれが笑えようか。

「奇妙な(異質の連合)」、ぼくはそのことのコスモポリタンな夢想に、わずかな展望をもちたいと思う。その出発も帰着するところもエコロジイに源泉を持つ。政治のレベルというならば、先述の緑の運動にもうかがえるように、それはおそらくきわめて雑多な、非能率な、紆余曲折の経過をつねにもつだろう。けれども、「多用途性は不可欠であり、単なる生活のツマではない」のである。やがてそこからの連帯への思想とモラルが、成熟し、新しい何らかの変革を呼びよせるかも知れない。そしてそれは繰り返す。

春の海

緒方宗平

春さきの日のひかりは
ぬくもりをとりもどして
まぶしくふりそそぐ。
沖合いはるかに
よせくる波は
ねむったように静み
広漠として
つかみどころのない海。
ざざーつと
汀にくずれる波の姿態は
時を惜しむ
リズムを生む。
砂丘と松原が視界のはてにかすみ
白く汀が並行する。
足をぬらしてさわぐ子供たち。

かさなる骨のいたみをだいて
私の海がなる。

1980.4.24

そのためにはデモクラシイが前提とならなければならぬ。エコロジイを指標とするからには、あの一枚の特ダネ写真を撮るために多数のカメラマンがどなりあつて混雑することができる、報道、言論の自由は、いっそうに質を高めてゆかねばならない。

そしてたぶん、空気や水、食糧、空間、エネルギーが、大きな制限要因となりつつある社会にあつては、同じくエコロジイを原理とし、その効率的な管理、運営をモットーにして、デモクラシイに対抗するファシズムが台頭してくるであろう。しかも大衆はそれを支持するだろう。田園、都市、工場に、手つとり早く人間を配置するには、権力が一番である。デモクラシイでは権力も否定されようが、エコロジイではそれはできない。いやすでに、形をかえてのファシズムはその社会心理的準備を、着々と整えつつもある。

したがってぼくたちが選択しなければならぬのは、デモクラシイかファシズムかであつて、決して資本主義か共産主義かなどではないといふのが、ぼくの政治についての考えである。もとよりどちらを選んだところで、結局は滅亡への確率は五分五分なのだろうが、人間は滅亡への自由も、権利としてもつてい

るべきであろうと、ぼくは思う。

純粹な資本主義経済などは存在しない。自由市場にはいつも政治が入りこんでいる。純粹な社会主義経済なども存在しない。政治にはいつも市場原則が入りこんでいる。経済成長は両方の使命であり、一握りの大資本家、権力者たちも同様に存在している。大衆の生活はいつも不安と背中合わせであり、不安の濃淡は、それぞれの民度により異なっている。ただし、あからさまに浪費をつくりだすことはできないだろうという点で、エコロジイには、社会主義的な経済が似合うように思われる。つまりは、経済は経済におとしめるべきである。

たいせつなのは、エコロジイの、科学としてのいっそうの充実と、人類の制御を行なえるほどのデモクラシイの成熟である。

人民詩精神ということ

ぼくの直感では、エコロジイとデモクラシイと、人民詩精神は結びつくはずであつた。しかしぼくは何のためにこれを書いたのかというのが、いまのいつわらざる実感である。ぼくは、ぼくの人間と社会についての感想や思想のごときを、自分でたしかめる

べく努力はしてきたが、それは氷山にたとえらるならば、詩作品の海面下のある部分にしすぎない。

「詩と思想」という。この「と」のところにおそらく人民詩精神なることばは、深くかかわっている。それについていま語るだけの力も、準備もないことに、いまさらのようにぼくは気づくのである。かつてのプロレタリア派の一部の詩人たちのように、自らの社会歴史観とその実践の思想を文学的に述べることにより、詩精神に代えることは、ぼくにはできない。そんなことをするくらいなら、「うつくしいものを究めるころ」とでもいつておいたほうが、はるかにその内容に近いはずだ。だからいうまでもなく、このエッセイはきわめて非文学的なままに終わらざるを得ない。

金子光晴の詩を引いてみよう。

「かみころすあくび、きどつた身振り、しきたりをやぶつたものにはおそれ、ゆびさし、むほん人だ、狂人だとさげんで、がやがやあつまるやつ。そいつら。そいつらは互ひに夫婦だ。権妻だ。やつらの根性まで相續々^{つづつ}倅どもだ。うすぎたねえ血のひきだ。あるいは朋党だ。そのまたつながらだ。」

これは「おつとせい」の一部であるが、その時金子は、エトランゼのような位置から内なる大衆をみつめていたのであり、ぼくにはこれがその原像のように思われる。あるいは俗衆といふべきかも知れないが、彼らは、あらそって一歩でも他人より先に出ようとし、そのくせいも多数をたのみにし、權威に弱く、常識とか道徳に疑いのまなざしを向けること少なく、弱いものにはヒステリックになつてどなりちらし、無名の詩人などには鼻もひっかけない。エゴロジイなどには関心を示さないだろうし、自分本位で、思想とモラルがひとつながりであるゆえの苦しさなど理解もしないのに、結構ニヒルだったりもする。

彼らはいつとも社会の多数である。人民とはそれらに对立するものであり、自らの内部にいる彼らを恥じ、克服しようとするものであると、まづぼくは考えている。その克服の方向は、それぞれに思想の位相を異にしてみよう。

内なる大衆性を剔決してやまない精神は、いずれそれらが支える権力とも向きあうことになる。己れの敵は己れでもある。無意識のうち蓄積されてしまった、あるいは蓄積されつつある権力への習性ほど、自分を不自由

ある削除

『中野鈴子全詩集』

西 杉夫

中野鈴子にはすでに詩集『花もわたしを知らない』と『中野鈴子全著作集』があるが、こんど大牧富士夫らの努力によって、『中野鈴子全詩集』が出た。この内容を見ると、新しく発見された詩はほとんどないが、初出がよく調べられていて、それぞれの詩について加筆や削除がよくわかるようになっていて、

中野鈴子はふしぎな詩人である。ゴリゴリの公式主義者として、スローガンをただあれこれの情景をかりてのべただけの詩をかくかと思えば、人間の気持を奥深いところとらえた鮮烈なほとばしりをわたしたちにつきつける。それは詩人としての時代の変化とか、成長とかいったものではない。ほとんど同じ時期に、くつきりちがった二つの流れの詩がかかれるのである。このことについてはわたしは『中野鈴子の詩と政治』（評論集）プロレタリア詩の達成と崩壊』で論じたこと

があるが、いわばふたりの中野鈴子が存在するところに、中野鈴子の詩の問題は集約されると思われる。

「わたしは深く兄を愛した」は、中野重治の転向を扱った詩である。革命的働き手としての兄が牢獄にとらえられ、その兄を愛しつづけてきたのに、ある日の法廷で思いもかけぬ転向のことばが兄の口から出たときの驚きを、このような題材にしては押えた調子でうたっており、それだけに作者の気持の波うちがはげしく伝わってくる佳作である。さいごの三行はこうなっている。

薄らいだ午後の陽ざしがつよく目にしみた
街は色彩のない雑踏にだだっびりく白け
ながい時間が一時に去ってしまった

激情をこめて、しかし正確にあたりを見るところに詩人がいるといえるだろう。ところが大牧の調べによると、初出はこうではなかった。発表誌は一九三五年三月号の『文芸』であり、詩のはじめからいま引用した三行までは、多少のちがいはあるもののほとんど同じと見ているのだ。そしてそれが典型的な公

にするものはない。

人民ということばは、ぼくにどこか照れくさく、重つくるしくもあり、それ故というわけではなく今日のぼくはほんとうにここまでで、だから人民が書く詩が「人民詩」なのだといつてみたところで、そんなことでは長谷川さんは、「やつぱり君は『コスモス』の許容の限界だ」とまたいうにちがいない。

水浴び

夏川小吉

私の家の二階の窓と同じくらいの高さで、向坂逸郎さんの書庫の屋根があり、そこに延びてきたイチジクの枝に、うまそうに実が熟してきた。ぼくはあの味が好きだから、自分のところからは絶対とどかない大きな書庫の平たい屋根に来てその実をたべる小鳥どもがうらやましい。あれこれと小鳥がやってくるが、キジバトと尾長とスズメの他は名をしらない。雀と同じくらいの大きさのも種類となくイチジクを食べに来る。今日みたくに晩夏の小雨がしとしと降って、上がった後にはセメント塗のところに浅い水溜りが出来て、名をしらぬ小鳥たちが種類も来て、しゃべくりながら水浴びをはじめ。

人間も猫も来ないから小鳥たちの声がまことにたのしそう。勝手に好きなことをしゃべりつつ、水浴びするように見える。(八・二二)

式詩風のものなのだ。兄にたいして、老いた父親さえはげましていたのといつたことをくどくどとかき、さいごはこう呼びかける。
「……」と「×」は伏字。

誰が……出来よう

飢餓と××のふちから立ち上る百万千万の

人々の止みがたい自覚を！
そうです

恥と苦悶のしたたりをひきさげ

新しい……再び起つあなたをわきしは信じたい

中野重治の苦悩はこのようなうすつべらなおしゃべりとは、すこしも交わりはしなかつたろう。そしてこのような詩句を長々とつけ加えたとき、この詩はまったく愚作になる。先に引用した三行でおわつたときの、静けさのなからわきあがってくる凄みのようなものはなくなり、通俗政治屋がわがもの顔にふるまっている。自分の気持を、そのゆれのままだに鋭くとらえることのできる詩人と、がんばりましょうと唱和する公式屋とが奇妙に同居しているのが原作ということになる。十九才、二十才と結婚、離婚をくりかえした中

野鈴子は、その心の傷をいだいたまま上京するわけだが、その彼女が接したプロレタリア文学運動は、硬直した政治論にふりまわされていたのであり、免疫のないなか娘だけに一気にそれにいかれてしまいがちで、しかしそのなかで目ざめていく詩精神の存在もまた認められる。それがひとつの詩にあらわれているのが「わたしは深く兄を愛した」だったといえる。

ところでおもしろいのは、中野鈴子が戦後にこの詩を詩集に収録するにあたって、後の部分を大たん削ってしまった、はじめに引用したあの三行でおわらせていることだ。わたしはふたりの中野鈴子と違った。戦後になっても、たとえば愚劣きわまりない「小林多喜二のお母さん」をかくほどに、公式性は中野鈴子に深く巢食っていたのだが、状況の進展と彼女の成熟によって、これがさすがにだんだんと弱まり、逆に初期の佳作「途中で」らしいひとつの流れとしてあった詩的独自性にみがかがかかってゆく。彼女はとも詩の方法に意識的だとは思えないのだが、しかしそれが一応は確立していく方向にあったことをこの削除は物語っているのだろう。

はなしの自由席

植村諦と「鎮魂歌」

清水 清

五月二十四日に、植村諦の今度出た「鎮魂歌」を記念する会があり、はじめに立つた相沢尚夫が、「植村が無政府共産党の委員長に選ばれたのは、ただ彼が一番年長であったというだけで、そのために七年の長い監獄暮らしをすることになって、いまでも気の毒なことをしたと思っている」という話をした。このことは、相沢の著書「無政府共産党」にも書いてあって、はじめて聞いたことではないのだが、相沢本人の口からじかにきくと妙に印象が強く、ずい分軽々しい、いきさつに思われて私は何か残念な思いがした。事実はその通りであったのだろう。しかし、私はそう思いたくない。相沢の本には、このいきさつのもとに「彼は白熱し、激昂する激論のなかかや結論を引き出すことは誰よりも上手だった。

彼の説教するような説得には一種の風格があった」とあり、だから委員長に推されたのだと私は考えたい。いかにも感傷にすぎないことを言うようだが、この方が私のもっている植村諦のイメージにふさわしい。

「人が盗むということは、盗まなければ仕方のない世の中の状態があるからで、そんな状態をおこす社会でなければ人は盗みなどしない」——少年の日の私に植村諦が教えてくれた言葉である。乾いた土に水が沁みこむように、こういう彼の話すところは、少しばかり社会に目ざめはじめた私にしみこんだ。現代では盗みの要因は複雑多岐で、これほど単純には片づけられないが、昭和八・九年代の社会では、貧しいということが、盗む要因の大多数を占めていたことは間違いない。秋山清は、折にふれて「清水は植村の弟子」という。詩を書いて出会った植村諦に、詩を書くについて教えられたという気はしないが、社会という基本的なことに目をひらくことに手をかしてくれたのだから、先生であるにはちがいない。同じことが「鎮魂歌」の追悼詩に出てくる「弔詩」の上村実、「君は行ってしまった」の伊藤悦太郎についてもいえる。

上村実は昭和九年三月十二日、東京競馬場

雉子の声は沈む

はじめに鳴きだすのは雀
まだ明けぬ廂。
そのつぎは山の方から鴉がなきはじめる。
つづいて山鳩。
こじゆけいの声は
家の庭先を走る。
わが毎日の朝あけ
土の味は喉をしめつける。
土の肌は血のまじった痰を吐きだす。
縄文土器の尖った尻にあこがれて
山の峰を歩く。
谷川を渉る。
士官に追いつめられた女を
水のなかから救いだして口説いたのは誰
だ。
そのために眼球はとびだした。

伊藤正斉

それでも懲りずに
火をつけた柶がらのなかの土くれに
一万年前の乳房を探らうとしているのだ。
これは亜硫酸ガス
黄砂の吹きわたってくる地方の
地形のごときものではない。
狂い死にする水俣の猫の面をかむって
一人芝居をつづける砂田明は
いまだこを歩いているのか。
花の終った栗の木に
ちっちゃな ちっちゃな種が育っている。
あじさいは花ざかり。
梅雨まだあけぬ空に
勝った勝ったというシユプレヒコール。
竹藪の奥に 雉子の声は沈む。

がいまの府中へ移転したあとの目黒の敷地の雑木林で縊死した。数えの三十一才であった。上村の死について岡本潤は、

「戦ふ男と頼りを求める女。／男の情熱の高まるのに比例して女は冷えて行った。／『常識』が女の言葉を掌のようにひるがへさせた。（略）世俗の縄が彼の首を絞めたのだ。」

と追悼の詩「歴史」を書いて、いつ捕えられるかもしれない生活の安定のない男に、世間なみの幸福な家庭を願う女の「世俗」が上村を絶望させ、死に到らしめた、と究明した。

植村諦は違う。

「運動の為には常に全身を捧げていた真摯な君よ。／友の為には最後の一枚の上着を脱いで与えた君よ。／そしてやるだけやって絶望した。／望みなく生きるなら死を選ぶと書き残した君よ。／（略）綿密に張り渡されたインテリゲンチヤの、／自縄自縛の思考の網に、／私は両手でメチャ／／につかみかかりながら、／劇しい憤りを感じているのだ」

と、運動の状況とその中でインテリゲンチヤ自体の脆弱さとして捉えている。当時のアナキズム運動の逼塞と恋の破局という複合す

『熱烈歓迎?!』 自衛隊様』

向井 孝

いまより、転乗完了まで、私語を禁ずる。
よし下車用意！」
号令で、みんな一せいに立上る。
鉄かぶと、戦闘服、雑のう、の完全軍装。
せまい通路にびっしりと体を押しつけて、夕闇の林のように。

1 「みんな、聞け。この列車の大阪駅着は、21時1分である。

到着ホームの3番線側には、すでに専用列車、西鹿兒島行きが待期している。全員二分二〇秒以内で、転乗する。往路と同じく、一秒のおくれも許さない。

到着ホームは、民間人の立入り、全面禁止である。

したがって、関西方面出身者で、家族等の出むかえがあっても、面会はできない。

なお、停車中、少数過激分子が挑発行為に出るおそれがあり、との情報もある。警務隊が出動配備している。われわれは一切無視、黙殺する。相手にしてはならない。

2

列車は、大阪駅の大きな光のなかへ、ゆっくりはいつていく。
車窓のうしろへ飛んでいく隣りホームの明るい雑踏。

「おい、手をふってるぞ」
「おつ、女たちのでむかえ」

「注意！窓際によつてはならん」

小旗ふつてる、あの娘、カッコイイ
「おい、あの小旗、どうして黒丸や？」

「全員、下車」

とたんに、ぼくらは突きとばされたように車内からとびだしていく。

たちまち、プラットホームにあふれて、ひしめきながら、停っている3番線の車輛へとおしよせる。

3

北海道への侵攻を想定した、〈列島縦

断、兵員緊急輸送・復路作戦〉

大阪での乗換え停車14分。

車窓にうつるとなりの2番ホームは、がらんとして、七・八人の人影だけ。

と、急に、中央階段あたりがさわがしくなる。

二〇人あまりの男女が、駆けあがってくる。

黒丸の小旗がゆれる

手をたたきながら、こちらへゆっくり移動してくるらしい。

眼の前へ横断幕がきて、とまる。

熱烈歓迎?!お国の為に死んで下さる、自衛隊様

祈・武運長久!しかし次は核ボタン戦争

4

「ブラインドをおろせ!」

「鉄帽、装具は網棚にあげてよし」

発車ベルが鳴りつづけている。

線路ごしに、2番ホームから聞えてくる声。

「がんばって下さい」

「ごころうさんです」

「お国のために、仲よく、しましょう」

「注意!ブラインドのすき間から、覗いてはならん!」

「戦争になったら、逃げるんよ」

「上官の命令なんか、聞かんでもエエよ」

がたんと列車がゆれる。

車窓にならんで、ホームのはしを、だんだん走り出しながら、みんなで口々に叫んでいる。

「はよ、やめて、帰ってきてね」

「さよなら、体に気をつけてエエ」

みるみる速く、プラットホームのはずれでひとかたまりとなっていく。

「死んだらアカン。アカンでエエ」

もう、まったく見えない。

いま、列車が、鉄橋をわたりだす。そのひびきにまじって

まだ、聞えている声。

いつまでも合図している、数十本の手。……さよ、ならあ……

はつと、自分の声に気付く

あたりをみまわして、それから、また……死な、へんぞお……

……命令なんか、きかないぞお……
いま一そうはげしい、轟音の中。

る要因があったことは推察するに充分であるから、どちらの考えもちがってはいない。しかし、私はより多く植村諦の考え方に同調するものがある。『世俗』は引き金であったであろうとの思いがつよいからだ。二つの追悼詩を読みくらべると〈千万の愚衆と共に君の歩いた道を蹂躪するだろう〉とうたいあげた植村諦の詩の方が、内容的にみれば乾いている。同時にその弱点がストレートに人間のあたたかみを感じさせるように思う。

もうひとつの伊藤悦太郎の方、「君は行ってしまった」は、なかなかカラツとしていて〈流れタマが君の肉体を貫くと／なんだひでえことをしやがると／君はそのタマを拾い上げてポケットに入れ／どしどし歩いて行ってしまったのだ〉

というふうに植村諦の詩にしては珍らしいユ一モラスなところもあり、更にもっと注目しておきたいのは、

〈自由主義だの、マルキシズムだの、アナキズムだの／何もありやしないじゃないか／自由なんてどこにあるんだい／日本中が捕りよじやないか〉

と、占領下の昭和二十三年頃の日本の姿を批

判しているところだ。上村申詩にみる『屍を越えてゆく』式の感傷的決意表明はここにはない。もちろん歴史の状況の相違はあるものの、追悼詩というありきたりの形をふみ出して、いわば追悼に名をかりた現状批判が主眼であったと思われる。この詩のように、植村諦の詩としては全体に数少い傾向は、未完詩集として収録された中にもある。「暗い道で」はそれに当る。この詩は初期「コスモス」十二号に載ったものだが、その前年の昭和二十二年に出版された第二詩集『愛と憎しみの中で』に収められた作品にくらべると、未完詩集は、ほんのいくらかだが詩が変りはじめているように思う。「愛と憎しみの中で」が手もとになく、「アナキスト詩集」に抜粋された数篇との比較感想なので心もとないが、流露感を押えようとしているようであり、叫ばなくなりつつあることを感じさせる。

小野十三郎は『鎮魂歌』に寄せたあとがき中で「銀座を走る電車の中で酒が飲める」という、植村諦の日赤病院の死床で語ったうわ言に触れて、「詩の上で、人を啞然とさせるような、こんな夢を植村に見てほしかったという想いがある」と書いているが、もし、二十数年前に死なず、現代に生きて彼が詩を書

遠くない距離で

— 館野鉄工所米軍機墜落事件 —

梅田智江

— 今から14年前の昭和39年9月、神奈川県大和市で鉄工場を経営していた館野正盛さん（当時47）の工場に、ジェット機が墜落した。厚木基地に駐留していたアメリカの一機だった。この事故で館野さんは、その工場で働いていた長男（当時25）次男（当時23）三男（当時19）とオイを含めた従業員2人と工場と住居を失った —

館野さんは今、ひとり暮らしをしている。仕事は変電所勤務。

変電所から変電所へ、古い部品を新しい部品に変えていく仕事だ。

身体を悪くして

休日には家にいる。

洋服ダンスと茶ダンスと

コタツと、つけっぱなしのテレビの

にかこうにか、また工場もつくって、子どもたちもみな一人前の職人になってね。一息ついたとき、あれだよ。ドスンだよ。」

ところが

この国は不思議な国だった。

アメリカの飛行機が落ちてきた場合、それは運が悪くてお気の毒ではあるが、どこにも責任がないという。

再建しようとした工場は危険区域に指定したからと壊され、そのかわりと約束した代替地は待てど暮せどナシのつぶて。

「それで仕方なく裁判、起こしたんだ。

それまでは、僕なんか、仕事さえしていればいい人間だったんだ。法律のことなんか、全く知らなかったからね」

ところで

この国は不思議な国だった。

法律を知らない人間をだますのは、悪徳不動産屋ばかりでなく、防衛庁だって堂々とやる。公判5回。敗訴。

どうしても工場を再建したい館野さんと、一日も早く事故を忘れたい奥さんと……
気持は離れていくばかりで、別れたという。

そして今

それきりしかない部屋で

干物を焼き、湯を沸かし、

コタツに坐って

テレビを観ながら

メシを食う。

ぶ厚い六法全書が部屋の隅にある。

六法全書の上には老眼鏡。

かつては

彼の奥さんがメシを炊いた。

大きな台所で

山のように野菜を刻み

魚を煮て

どんぶりにタクアンを盛った。

食堂では

仕事を終えた彼や息子たち、工場の若い衆たちが腹を空かせて待っていた。

テレビの音より

もっと大きな男たちの笑い声。汗の匂い。

またたくまにカラになる皿。

「15の年に鉄工所にテッチ奉公してね。27の時だったか独立して、友だちと2人で工場を建てたんだが、戦争で焼いちゃってね。それからはまあ、スクラップでまあおして、どう

ガランとした館野さんの部屋に

一冊の六法全書がある。

さいごにゆきあたるのが、これしかなかったの。

この国は淋しい国だ。

暮らしに法律が顔をだす時、

それは、ほとんど、むごい眺めだ。

法律——辞書をひくところ書いてある。

社会生活を保つために定めた支配的（特に国家的）な規範。

私の家には今、六法全書はない。

けれど、明日、

私はそれを、手にするかもしれない。

その時、私は、何をしたら、いいの。

いいえ、その前に

私は、どう生きていったら

いいの。

（註）この詩は「怪傑トバンガNo.9（ベトナムの子供を支援する会発行）」の中の、きくちみちこさんの書かれた「館野さん訪問日記」にヒントを得た。

いていたとしたら、体を貫通した銃弾をポケットにしまつて、どしどし行ってしまう伊藤悦太郎のように、虚構をなймаせた詩を書いたかもしれない兆しは、いくらかあったと思うのは、私の思いがいであろうか。

『鎮魂歌』は植村諦の文学（詩）観を展開するように、編者秋山清の苦勞が払われている。詩論のはじめに書いた「まず自らの欲するものを」とは、いま「コスモス」同人たちがここ数号にわたって発表しつつある「詩をなぜ書く」に通じる問題であり、秋山が数年来の主張「自分のために詩を書く」に重なり合うテーマであるし、「詩の批評について」の一章は黒川洋の作品評に対して、いろいろ出てきた、批評の在りようの問題を論じていて、三十年余前にすでに出ている古くて新しい、つまり確立されていない問題である。植村諦のこれらの意見についての私の意見は、別に改めて書くこととして、いまは彼の論旨のアウトラインを示す文章があるので次に転記しておくことにする。

〔前略〕—僕はその頃自分の詩を芸術的に表現する技術に苦心しないで自分の行動の表白としての叫びに夢中になっていた。だから僕の詩は拙くて人々の愛情を呼び起す

ようなものではなかった。しかし僕はそのことについて少しも芸術的な苦痛を感じなかった。僕はその叫びの中に却って無数の芸術的イメージを感じる事ができたからだ。僕は今でもそうだが、詩とは、芸術とはかくあるべしなどという無数の批評家や芸術理論家ども一切のもつともらしい規定には絶対に服しないものだ。僕はそういう高い、また低い人々の好尚や趣味に合わせるために詩を書いているのではない。僕は自分の第一欲求に基く必然に従って詩を書いているのだ。その詩が大衆的であったり孤高であったりするの僕自身の意向によるのではなくて僕の生存のあり方によるのだと思っている。（『草の葉』創刊号— 昭二一・九）

『鎮魂歌』

植村諦詩・論文集

一七〇〇円

コスモス社で扱っております。